

恩を忘れた日本と恩を忘れなかったトルコ

1890年、600人以上を乗せたトルコのエル・トゥールル号が、明治天皇に親書を持参して日本を訪問した。その帰途、紀伊大島の沖合で台風による時化のため遭難した。大島の住民の多くは漁師である。遭難したときの苦しみをよく知っている。海難に際し、暗黙の了解で反射的に行動し、69名を苦勞して助けた。自分たちも貧しい。その貯えの食品やら水分やらを供出し、亡骸は丁重に弔った。日本中から多額の義捐金が送られてきた。明治帝は、これを喜び、救出できたトルコ人を軍艦2隻でトルコまで連れて帰らせた

この4年前、イギリス貨客船ノルマントン号の遭難に際し、かれらイギリス人たちは、白人のみを救出し、日本人も25人が亡くなった事件があった。

トルコ人は、オスマントルコの時代からロシアの脅威に曝されてきた。だから、日露戦争の時には、一喜一憂、なぜか、日露戦争の経過をよく知っていて、日本が勝利すると快哉を叫んだ。ムスタファ・ケマル・アタチュルクのような英雄が現れ、革命を起こし、もとより親日国となった。そして、この出来事を学校の教科書に載せ、国民全部がこれを知るようになった。

1985年、イラン・イラク戦争に際して、テヘランは、イラクの爆撃に苦しめられていたが、いざというときに、「日本政府は頼りにならない。」

たとえば、他の国では、緊急事態になったら、やってくるパイロットは軍人である。全部特別便にして救助する。決して民間人パイロットではない。

テヘランには200人以上の日本人が在住している。

イラクは、今から48時間以内には、イラン上空を飛ぶ航空機は、空軍機のみならず、民間機も攻撃すると宣言した。時間が迫っている。日本政府は、JALに依頼するが、「安全を確保してくれないと飛行できない」という。結局、JALは飛ばなかった。

どういうルートか、トルコ首相に日本人の救出を依頼する。当然トルコ人は怒る。ところが、日本人の救出に話が及ぶと、「われわれは、陸路で帰国することができる」と納得して日本人に譲ってくれたのである。

これは、トルコの恩返しではないか。

さらに感動を呼ぶ物語がある。トルコ航空の機長は、オルハン・スヨルジョ。元軍人で、危険な任務は断ることができる。ところが、このとき声をかけられたクルーの誰1人として断らなかったのである。DC10が2機、テヘランのメヘラバード空港の着陸許可が下りないところ、日本側が交渉し、なんとか許可が下りた。

“Welcom to Turkie”が聞こえたとき、戦闘機が2機、顔が見えるほどの近距離で飛行している。あとで護衛機とわかった。イスタンブールに着いて、その後、日本にかえったが、日本政府もJALもなにもできなかったのである。

あるスチュワーデスは、ごく初期の妊娠を隠して（会社にもご主人にも）「どうしても日本人を助けたかったんです。そして大昔の恩を返したかったんです。」25年後にもエル・トゥールル号遭難のことを語り、すぐ傍らにいた娘さんのことを、あの時お腹にいた娘です、と言った。

我々が、将来、このときの恩返しをするときがくるだろうか。

外務省が、起こって欲しくないことは起こらない、という姿勢でいるかぎり、悲観的だな。

さて、日本の恩返しについて。敗戦後、日本を分割統治するという話があったとき、セイロン（現スリランカ）が、国連で反対を袁術してくれた。このおかげもあって、分割統治の話はなくなった。今、スリランカは、海のシルクロードとして、中国の金のばらまきにより、港の租借権の問題があり、かなり厳しいところらしい。なぜ日本は、経済援助ができないのか？

戦争中、零戦がインド洋のセイロン上空で、英国のハリケーンと戦った時、あまりの零戦の強さに、「まるで演習のごとし」と打電した。セイロンも一時占領化していた。それでもセイロンは、敢然と正論を主張してくれた。今、日本がなにかしなければ、忘恩の徒になってしまう。・・・外務省に危機感がまったくないのが悲しい。

次にチベットである。鬼畜米英の蒋介石支援のルートに、チベットをつかわせてほしい、と頼んだが、チベットは拒否してくれた。

いわば恩人ではないか。

ところが、中国のチベット弾圧に対し、日本はなにをしてきたか！ 傍観です。朝日新聞のように、中国のすることを正当化するのみである。

トランプ大統領は、辛亥革命の孫文を詐欺師と見抜いて、満洲は、清の故国で、万里の長城外は、中国領ではない。台湾は支那に帰属する、と習近平が言ったら、おまえの領土ではないと真っ向から否定した。今は、ウイグルの人権を問題にし、先月は「チベット相互アクセス法」にサインもした。満蒙回蔵は、けっして漢民族ではない。日本の心ある人が言いたかったことを(あるいは言っているのだが、マスメディアが掲載しない) 代わりにいつてくれた。

それにしても、日本のだらしなさ。

2019.1.25.